ピエール・プレヴォと *Bibliothèque britannique*

―― 転換期ジュネーヴに見る知のインターフェイス ――

喜多見 洋（大阪産業大学）

Ⅰ．はじめに

ヨーロッパ的な視野で啓蒙思想と経済学の関係を考える場合、従来のような国民国家論的な思考は、必ずしも有効であるとは限らない。本報告では、そうしたケースの典型として、時間と空間を「転換期ジュネーヴ」に設定する。そもそも 18 世紀後半のヴォルテールやルソーのジュネーヴにかかわる知的活動を想い起こせば容易に想像がつくように、啓蒙を問題にする際にジュネーヴは重要なポイントであるが、このことは経済思想の展開を問題にする際にもあてはまる。そして、ここではこの時期の特徴的人物としてピエール・プレヴォ[1]を取りあげる。そのうえで、セッションのテーマである啓蒙思想と経済学の関係を考える場合の手がかりとして、当時ジュネーヴで刊行されていた雑誌 *Bibliothèque britannique*に注目することにする。

なお、ここにいう「転換期ジュネーヴ」とは、18 世紀中葉から 19 世紀前半にかけての時期のジュネーヴを指している。現在のジュネーヴは、スイス・ロマンドの中心都市として、国連ヨーロッパ本部をはじめ国際労働機関(ILO)、世界貿易機関(WTO)など多くの国際機関が置かれ、永世中立国スイスを代表する都市の一つとなっている。しかし意外なことに、チューリヒやベルン、バーゼルのような他のスイスの主要都市とは異なり、ジュネーヴがスイスに加わったのはかなり遅く、1815 年のことである。つまりジュネーヴは、現在のスイスを構成する 23 のカントンのうち、22 番目にスイスに加わったことになる[2]。しかもこの町は、スイスの中では少数派であるフランス語圏に属しているのである。これらのことからわかるように、ジュネーヴという都市は、歴史的に見てスイスの中で必ずしも「典型的なスイスの都市」、「スイスらしいスイスの都市」というわけではないし、従来のヨーロッパ史における一国史観的な捉え方に適した都市というわけでもない。むしろ大国フランスとスイスのはざまに位置する境界の都市といったほうがよいかもしれない。現在では、フランス語圏スイスの中心都市となっているジュネーヴは、この時期、中世以来の都市国家である「ジュネーヴ共和国」から、フランスへの併合により「フランス、レマン県の一都市」となり、最終的に「スイスの一カントン」へとその政治的形態が大きく変化している。も

---

[1] Pierre Prévost,(1751-1839).

[2] 最も新しいカントンであるジュラがベルンから分離、独立して 23 番目のカントンとしてスイスに加わったのが 1979 年のことであるから、それまではジュネーヴがスイスに最後に加わったカントンであった。ただし現在の 23 カントンのうちバーゼル、アッペンツェル、ウンターヴァルデンの３つは、それぞれバーゼル=シュタット(Basel-Stadt)とバーゼル=ラント(Basel-Land)、アッペンツェル・インナーローデン(Innerrhoden)とアッペンツェル・アウサーローデン(Ausserrhoden)、ニトヴァルデン(Nidwalden)とオプヴァルデン(Obwalden)という半カントンからなっている。

ちろんジュネーヴの変遷は、当時のヨーロッパにおける国際関係と密接にかかわっているわけだが、こうした変遷だけ見ても、ジュネーヴを含むフランス・スイス国境地域が従来の国民国家論的思考に適さないことは、明らかであろう。本報告では、こうした特殊な場であるジュネーヴで、この町の知識人の一つの典型とも言えるピエール・プレヴォの知的活動を通して啓蒙思想と経済学について考えてみたい。

Ⅱ．ピエール･プレヴォ

では、ピエール･プレヴォとは、どのような人物であろうか。彼は、18 世紀から 19 世紀にかけ、ジュネーヴのアカデミーの教授であった。一般に哲学者、自然科学者として知られており、『磁力の源泉』[3](1788)、『熱にかんする物理力学[物理工学]』[4](1792)、『放射熱にかんする試論』[5](1809)など自然科学分野の著作をいくつも残している。けれども彼は、社会科学者でもあり、経済、社会問題に関しても多くの論考[6]を残している。プレヴォの名は、経済学史学会編の『経済思想史辞典』には載っていないが、経済学史上もこれまで以上に注目されてよい人物である。

彼の生涯を簡単にたどっておくと、プレヴォは、1751 年ジュネーヴに生まれている。そこで育ち、町のアカデミーで神学、法学を学んだ彼は、1773 年に学士の称号を得ている。その後、オランダで一年間、家庭教師をしてから、イギリスを旅行し、パリへ行き、ドゥレセール家の家庭教師となる、その時の教え子が、「博愛家のドゥレセール」として知られるバンジャマン・ドゥレセール(Benjamin Delessert, 1773-1847)[7]である。また、プレヴォは、パリでJ.-J.ルソーと知り合い、文学者として世に出ている。そしてそれがフリードリヒ 2 世の目にとまり、1780 年にベルリンでプロシア科学アカデミー会員ならびにl'académie des noblesの教授に任命される。彼はそこで文献学および化学を研究し、経済学に関するいくつかの論考も著わしているが、父の病気もあり 1784 年にプロシアでの職を辞し、ジュネーヴのアカデミーで文学の教授に就任する。故郷に戻った彼は、まもなくこうした学術教育の面での活動に加え、政治の面でも活躍するようになる。すなわちプレヴォは、1786 年にジュネーヴの拡大市参事会のメンバーに加わり、1793 年には、この町の国民議会(l'Assemblée nationale)のメンバーにもなっている[8]。また彼は、同じ年に物理学およ

---

[3] *De l'origine des forces magnetiques.* Barde, Menget & Cie., Genève, 1788.
[4] *Recherches physico-mecaniques sur la chaleur.* Barde, Manget & Cie., Genève, 1792.
[5] *Essai sur le calorique rayonnant.* J.J. Paschoud, Genève & Paris, 1809.
[6] *Etat des finances de l'Angleterre*, 1782 ; *De l'économie des anciens gouvernements comparée à celle des gouvernements modernes*, 1783 ; *Trois lettres adressées au Journal de Genève sur une question de finances*, 1789 ; *Pararellèle de deux révolutions*, 1790 ; *De la disette*, 1804.
[7] バンジャマン・ドゥレセールは、下院議員、フランス銀行総裁を歴任した人物であるが、学士院会員にもなっており、1780 年代にスコットランドに留学して、アダム･スミスとデュガルド･ステュアートにかわいがられ、ワットと親交を結んだとされている。なお、ドゥレセールの家系もユグノーであり、スイス(Vaud)起源である。
[8] だがプレヴォは、4 ヶ月で国民議会の議員を辞めてしまう。

び哲学の教授に任命されている。こうして研究、教育の面では順調であったが、これで彼の生涯がすべて平穏というわけにはいかなかった。彼もまた時代の影響を被っている。1794年の夏にジュネーヴの市政を握った革命派は、プレヴォを反革命容疑者として逮捕し、投獄するのである。幸い 20 日間で釈放された後も、彼は教員生活を続けるが、1798 年になると、ジュネーヴがフランスに併合されてしまう。彼は、今度は、ジュネーヴのフランスへの併合を実施する委員会に加えられ、併合下のジュネーヴでフランス学士院の通信会員になっている。そして 1814 年にフランスへの併合が終り、ジュネーヴがようやく独立を取り戻すと、彼はConseil représentatifの一員に加わる。そこで彼は、能力を発揮するが、1823年に公職を全て辞任し、残りの生涯を学術研究に捧げて 1839 年 4 月に亡くなっている。

こうしてみるとプレヴォの生涯は、全体としてはジュネーヴの学者の平穏な生涯といえるであろう。そしてプレヴォの知的活動のうち、経済学史の面で注目すべき点は、第一に、スコットランドとのつながりである。彼は特に、スミスの伝記作者、全集編集者として知られているデュガルド・ステュアート(Dugald Stewart, 1753-1828)とたいへん親しく、ジュネーヴ大学公共図書館(以下BPUと略記する)のプレヴォのコレクションには、ステュアートが彼に宛てた 20 通の書簡が残されている。彼は、またステュアートの『人間精神の哲学要綱』[9]の仏訳者であり、スミスの『哲学論文集』の仏訳[10]も出版している。

第二には、イギリスとの家系的つながりである[11]。プレヴォの妻は、マーセット家の出であり、『経済学対話』(1816)[12]を著わしたジェイン･マーセットは、彼の義姉であった[13]。そんな関係もあり、彼の息子たちは、いずれもイギリスで働き、マルサス人口論とのつながりもそうした環境から生まれてくる。すなわち彼は、早い時期からマルサス人口論に注目し、上の家系的つながりを利用してマルサスの『人口の原理』の仏訳[14]を出版している。彼は、フランス革命後のヨーロッパ大陸にあって仏訳や自らの論説によってマルサス人口論の大陸への普及に大きく寄与したといえる。ちなみに 1817 年に出たマーセットの『経済学対話』仏訳の訳者はプレヴォの息子ギョーム･プレヴォであり、これもまたプレヴォの家系

---

[9] Dugald STEWART, *Eléments de la philosophie de l'esprit humain*, 2t., Genève, Paschoud, 1808。プレヴォによる仏訳の第 1 巻と第 2 巻は、*Elements of the Philosophy of the Human Mind*, London, 1792 の翻訳である。

[10] Adam Smith, *Essais philosophiques*..... précédés d'un Précis de sa vie et de ses écrits par Dugald STEWART... Traduits de l'anglais par P. PREVOST, Agasse, 1797.

[11] プレヴォの家系に関しては、次の文献が有益である。Olivier Perroux, *TRADITION, VOCATION ET PROGRES :Les élites bourgeoises de Genève (1814-1914)* , SLATKINE, 2006.

[12] Jane Marcet,(1769-1858), *Conversations on Political Economy*, 1816.

[13] マーセットについては、飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編著『マルサスと同時代人たち』（日本経済評論社、2006 年）所収の出雲雅志「ジェイン・マーセットと経済学の大衆化」を参照。

[14] T. R. Malthus, *Essai sur le Principe de Population, ou Exposé des effets passés et présents de l'action de cette cause sur le bonheur du genre humain*; suivi de quelques recherches relatives à l'espérance de guérir ou d'adoucir les maux qu'elle entraîne ; traduit de l'Anglois par Pierre Prévost, A Paris, chez J.J. Paschoud, Libraire . A Genève, chez le même Libraire. 1809

的つながりの中から生まれたと考えてよいだろう。

第三の注目すべき点は、彼のまわりに形成されていた知的ネットワークである。上に述べたように、同郷のルソーとも交際があったプレヴォの交友関係は、フランス語圏にとどまらず全ヨーロッパ規模で広がっている。BPUが所蔵する彼のマニュスクリプト類の中に残されている書簡類は、プレヴォが同時代のJ.-B.セー(Jean-Baptiste Say,1767-1832)[15]やマルサス、カゼノウヴ(John Cazenove, 1788-1879)、ガルニエ(Germain Garnier,1754-1821)、ガニール(Charles Ganilh, 1758-1836)、シュトルヒ(Heinrich Friedrich Storch, 1766-1835)らと経済学的な内容について書簡を通じてやり取りしていたことを示している。また彼は、シスモンディ(Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842)の先生でもあり、二人の親しい交流は、プレヴォの晩年、1830 年代まで続いている。

さらに、プレヴォは、ジュネーヴのアカデミーで彼自身が経済学を講義しており、BPUに所蔵されている彼が残した講義ノートは、19 世紀初めにヨーロッパ大陸のフランス語圏のアカデミーで行なわれていた経済学の講義の中味を知ることができる貴重な資料となっている。

以上のように、啓蒙の末尾に位置し、活発な知的活動を展開した知識人プレヴォにあっては、啓蒙の知と経済学が未分化な形で混在しており、それはこの時期の経済学と啓蒙の関係をよく示している。

Ⅲ. *Bibliothèque britannique*

では、こうしたプレヴォの知的活動と、*Bibliothèque britannique*誌は、どのように関係していたのであろうか。イギリスの雑誌や著作からの抜粋、書評を中心に作られていたこの雑誌を創刊したのは、ピクテ兄弟[16]およびモォリス[17]の 3 人のジュネーヴ人である。兄のMarc-Auguste Pictetは、ジュネーヴ･アカデミーの物理学教授、弟のCharles Pictet de Rochemontは、ウィーン会議でスイス代表として活躍した政治家であり、今日ではスイス史上の功労者となっている。モォリスは、フランス帝政下のジュネーヴ市長であり、Marc-Augusteの幼なじみであった。

これら 3 人によって創刊された *Bibliothèque britannique* 誌の特徴は、まず、それが刊行されていた期間にある。この雑誌は、1796 年から 1815 年までジュネーヴで刊行されており、その期間は、この町の転換期とちょうど重なっている。つまり *britannique* という語

---

[15] この手紙については、次の拙稿を参照されたい。Cf. Hiroshi KITAMI, “ Trois lettres inédites de Jean-Baptiste Say à Pierre Prévost ”, (『日仏経済学会BULLETIN』第 21 号, 1999 年), pp.57‐58. なお、セーのこの手紙のおかげで、下記の論考が、ベンサムの著作を取り上げたセーの論考であることが明らかになり、現在刊行中のセーの全集に収録される予定である。“ Philosophie.―Morale. Sur les récompenses politiques qu’il convient de donner à la vertu ; par M.J.-B.S… ” , *Mercure de France, Journal Littéraire et Politique*, juillet 1814, pp.64-69.

[16] Marc-Auguste Pictet(1752-1825) ; Charles Pictet de Rochemont (1755-1824).

[17] Frédéric-Guillaume Maurice(1750-1826).

のついた雑誌が、ジュネーヴ共和国の時代に創刊され、フランス併合期も引き続き刊行されて、ジュネーヴの独立回復後まで 20 年間存続していたのである。また一方、この時期は、経済学史の側から見ると、スミスが亡くなってからイギリス古典派の第 2 世代であるリカードやマルサスの経済学が登場するまでの狭間の時期にあたっており、英仏経済学交流の視点からセーやシスモンディの経済学を研究する際に、重要な時期であり、その意味でも注目に値する。

もう一つの特徴は、この雑誌が、Littérature と Sciences et arts および Agriculture anglaise という 3 つのシリーズに分かれており、20 年間に各シリーズ 60 巻というかなりの分量で、文学、哲学から、経済学を含む社会科学、自然科学、科学技術、さらには農学にいたるまで、たいへん幅広い領域にわたってイギリスの新しい思想・文化・科学技術をフランス語世界に紹介していたということである。そして、経済学とのかかわりもここに生じる。経済および社会科学は Littérature のシリーズで扱われているが、そこで目につくのは、次の３点である。すなわち、まず、①デュガルド・ステュアートの著作はもちろん、アダム･ファーガスン(Adam Ferguson, 1723-1816)の *Principles of Moral and Political Science* (1792)やジェイムズ･ハットン(James Hutton,1726-1797)の *An Investigation of the Principles of Knowledge and of the Progress of Reason*(1794)などスコットランドの思想、哲学が積極的に紹介されているということ。②マルサス人口論に大きな関心が払われ、『人口の原理』の紹介が行なわれているということ。それに③創刊時からベンサム功利主義が好意的に扱われ、『道徳および立法の原理序説』の抜粋、紹介がされているということがそれである。このうち特に①と②に関しては、プレヴォの存在が影響していると考えてよいだろう。

そして、この雑誌でのプレヴォの立場は、3 人の編集者をたすける編集協力者であった。たとえば①についていえば、第 2 巻でスミスの『哲学論文集』が紹介されたのに対し、プレヴォは、第 3 巻に「アダム･スミスに関するプレヴォ教授の編集者への手紙」[18]と題した一論を載せ、スミスの独創性に関し、第 2 巻の紹介における評価の問題点を指摘し、これを批判している。また②についても、『人口の原理』の抜粋を第 28 巻から第 30 巻まで計 12 回の分割掲載の形でかなり詳しく紹介し、さらに第 31 巻には、「マルサスの人口の原理についての著作によって示されたいくつかの指摘。プレヴォ教授による」[19]と題された一論も載せている。これは、この雑誌にかかわるプレヴォの活動の一端であるが、社会科学的領域だけをとってみても、彼がこの雑誌の存続にとって少なからぬ役割を果たしていたことがわかるであろう。

Ⅳ．知のインターフェイス

---

[18] “ Lettre de Mr. le Prof. Prevost, aux Rédacteurs, sur Adam Smith ”

[19] “ Quelques remarques suggérées par l’ouvrage de Malthus sur le Principe de population. Par le Prof. Prevost. ”

以上、転換期ジュネーヴを代表するプレヴォの知的活動と *Bibliothèque britannique* 誌の特徴を検討した。それにより明らかになったのは、プレヴォという人物と *Bibliothèque britannique* という雑誌がもつ国際性であり、しかもそれらは、いずれも啓蒙の色調を帯びていたということができる。フランス革命後の混乱が収まりきっていない時期に創刊されたこの雑誌は、以後 20 年にわたりジュネーヴから膨大な情報を発信し続けたが、その際に、編集協力者であったプレヴォは、彼自身のイギリスとの知的ネットワークを十二分に活かして、この雑誌への情報提供、寄稿等をつうじ経済学を含む知の交流、発信等に重要な役割を果たしていたのである。

そして、結局、*Bibliothèque britannique*誌は、編集者がこの雑誌の第１巻「序文」で述べているように「一種の連続的百科全書(une espèce d'Encyclopédie successive)」[20]としての性格を備えていたし、またヨーロッパ大陸にとっての「イギリスへの窓」としても機能していた。そして啓蒙の知の一環をなすイギリスのさまざまな経済思想や経済学が、この「窓」を経由して大陸に伝播したと考えることができる。ここには、フランスという大国の周縁部に位置する境界の都市ジュネーヴにおける知のインターフェイスのあり様が象徴的に示されている。プレヴォや上述の 3 人の編集者のまわりには、ジュネーヴ人の特徴ともいえる国境を越えた宗教的、血縁的、経済的つながりが重層的に重なりあってひとつのネットワークができあがっていた[21]。彼らは、そうした国際的ネットワークを十分に活用し、知の摂取、交流、融合、発信を行なったわけで、*Bibliothèque britannique*誌の活動は、その端的なあらわれであると考えることができる。なお*Bibliothèque britannique*は、ナポレオン帝国の崩壊、ウィーン体制の成立とほぼ時を同じくして、1816 年から*Bibliothèque universelle*と誌名が変わり、刊行が継続される。その意味でも、*Bibliothèque britannique*誌は、この時期を象徴する雑誌であるといえるだろう。

---

[20] Préface, *Bibliothèque britannique*, Littérature, t.1, 1796, p.7.

[21] すでに述べたようにプレヴォが関与したマルサスの『人口の原理』およびマーセットの『経済学対話』のフランス語訳などはそうした関係の典型的あらわれであるが、J.-B.セーやジョン・カゼノウヴにしても、いずれも父親がジュネーヴ市民であり、彼らの知的活動は、このネットワークにかかわっている。